

布袋讚

倉橋惣三

一
私は布袋が大好きである。あの圓い頭、ふくよかな頬、殊に便々たる蟠腹、いかにも呑氣に悠々暢達の容子が、何とも言へず大好きである。聞くところによれば、布袋は支那宋代の禪僧で、實の名は契此、號を長汀子とか言つた人だそうであるが、私はまだ其の傳を精しくしない。又必ずしも私の好きな布袋が、其の禪僧契此であつてもなくても構はない。私の大好きなといふ布袋さんは、繪に描いてあるあの布袋さんである。置物にしてあるあの布袋さんである。大きな布ぶくろを荷つて、長い杖をもつて、いつもにこ／＼として大勢の子供達に取りまかれて居るあの布袋さんである。而して私の布袋を好むこと年既に久しい。

二
圖私は此の間、鐵道協會樓上に開催せられた狩野芳崖の遺墨展覽會を觀た。私は豫て芳崖に傾倒する處のものである。一枚の作品毎に、私は其の前を立ち去り難く思つた。殊に彼の傑作たる『慈母觀音圖』は常に最も傾倒貴重する處のもの、其の前に殆んど時の移るを覺えなかつたことは言ふまでもない。しかし、之等の有名なる諸傑作は、豫て知るところのものも少くなかつた。ところが私は此の展覽會に於て圖らずも最も愉快なる發見をしたのである。それは他でもない。布袋の圖である。私の足は其の前にどの位長く立ち止まらせられたであらう。

圖は目錄によれば『布袋唐子遊圖』と題せられて

居る。三重縣中村近之進氏の所藏である。横軸の大幅で、布袋は例の漫々たる便腹をたれて踞坐して居る。五人の唐子が其の膝にまつはつて、嬉々として戯れて居る構圖に於て普通の布袋圖と多く變つたところはない。たゞ其の顔の相好。ほんとうに洒々落落として、腹底から邪氣のない顔つき、殊に子供達を見て、溶けて流れる様に笑みこぼれて居る目つき、私は私の好きなほんとうの布袋を實に此の作に於て見出した様の氣がした。蓋し、私の布袋を好むこと年久しいに拘はらず、實をいへば私の好きな布袋に滅多に逢遇し得ないことを常に遺憾として居たのである。彼の七福神の間に伍して、鶴や鹿や、いやが上にもいや目出度く拵へ上げられて居るのや、たゞ淺薄な滑稽趣味で取り扱はれて居る布袋には、いつも頗る齟齬させられることが少くない。そこへ此の芳崖の布袋に遇ふことが出来たのである。私の満足はどんなであつたらう。私は嬉しさの餘り、丁度其の夜開かれ

た兒童學會の宴會の食卓で、早速此の新發見の喜びを披露して序に日頃の所感を説いて、思はず一場の布袋演説をして仕舞つた位であつた。其の布袋演説に述べた私の日頃の所感なるものは斯うである――

三

吾々教育の業に従事するもの、殊に幼兒の教育に従事するものは、其の計畫に於て精しく、所期に於て密に、責任を感じる嚴に、すなはち大に細心でなければならぬ。之れが爲には種々の研究もしなければならぬ。研究は學問である。研究者としては其の學問に對して、頗る神經質でなければならぬ。又實際教育の上にも自分の實際して居ることに、絶えず精緻なる反省を施し、深刻なる批判も加へて見なければならぬ。即ち此の點でも當然神經質でなければならぬ。決して、粗笨、懶惰放縱であつてはならぬ。しかし、子供に直接接するに此の神經質を以てしてはならぬ。神經質は最

よく相手を神経質にする。而して子供は最も神経質でないものであつて、又神経質にされてはならぬものである。子供は抱かれようとする。包まれようとする。酔はされようとする。又そうしてやらなければならぬものである。それでなくては子供は伸びない。育たない。活きない、即ち吾々は、研究者、反省者としては神経質であつても、子供に接するものとしては、最も非神経質でなければならぬ。而して此の注意は殊に現代の教育に於て一層必要である。見よ現代の子供の生活の如何に神経質になり勝ちなことを、而して一層更に、現代の教育者の神経質であり勝ちなことを。所謂現代式に尖つた神経、いらだつた神経で取扱はれては、子供の神経もおのづから尖つて來、いらだつて來ざるを得ない。之れは深く思はなければならぬことではあるまいか。

四

斯う考へて來て、私の心はいつでも布袋に來る。

あゝあの大きな腹。布袋はあの大きな袋の中に一切の所有品を入れて居るのだといふことであるがあの大きな腹には一層多くのものを容れてあまた處はあるまい。あゝあの大きな包容の腹。だからいつでも悠々として迫らず、嬉々として慍らず。教ふるよりも共に遊び、共に遊ぶよりも子供等をして我れに於て自らよく遊ばしめるの大教育が、つとめずしておのづからに出來て居る。宜なるかな。布袋のある處、群兒の必ず嬉々として追隨するや。

しかし、こんな理屈を言ひ出しては、却て布袋主義の眞諦に背くの懼れがある。吾人はたゞ、目の前に、心の前に始終布袋を見て、自分もおのづと布袋の仲間になれば即ちそれでよい。